

宮沢賢治の童話文学

— ネネム・ブドリ系作品群の変遷について —

田 中 真 紀

はじめに

本論で取り上げる作品は、「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」（以後「ネネムの伝記」と略称する）と「グスコープドリの伝記」、それに「グスコープドリの伝記」の下書稿である「グスコープドリの伝記」と、「ペンネンノルデはいまはいないよ、太陽にできた黒い棘をとりに行つたよ」で始まる覚え書きである創作メモ（以後「ペンネンノルデのメモ」と略称する）以上の四作品である。

「ネネムの伝記」は、令弟宮沢清六によれば、大正九年の制作とされる。そして「グスコープドリの伝記」は、賢治が病死する前年である昭和七年に雑誌『児童文学』に発表された作品だが、大正十五年頃の制作と推定されている。つまり賢治は、大正十五年より繰返し推敲して、完成作として昭和七年に発表したものである。そして「ペンネンノルデのメモ」は、両作品の中間に制作されたものである。

従来この作品群では、「ネネムの伝記」が初期形であり、それから「ペンネンノルデのメモ」、「グスコープドリの伝記」を経て、最終形である「グスコープドリの伝記」が書かれたといわれている。

本論では、それぞれの作品の特徴と当時の賢治の意識を探り、その制作意図を明らかにすると共に、それぞれの相互関係を調べることににより、この四作品の関係を明らかにしていきたい。

一、「ネネムの伝記」

従来「ネネムの伝記」は、大正九年制作と推定されてきた。この説は、「ネネムの伝記」に関鉄三の筆写稿があり、その関の宮沢家に勤めていた時期が、大正九年といわれていたことを根拠としている。しかし校本全集では関鉄三は大正十一年まで宮沢家に勤めていたと指摘している。又、その時写時期を原稿用紙の種類から大正十一年頃と推定している。

一体「ネネムの伝記」は、いつ頃執筆されたのだろうか。

境忠一は、「ネネムの伝記」と大正七年に制作された「双子の星」と「蜘蛛となめくちと狸」を、賢治が大正十年一月に上京する以前に書いた初期の作品であると指摘しているが、それは断定できない。なぜなら、境忠一が「ネネムの伝記」と同作品群に属すると指摘した「双子の星」と「蜘蛛となめくちと狸」の挿入童謡は、「ネネムの伝記」の挿入童謡の特徴である同音の連続的エコーが見られず、異なったものであるといえるからである。

さらに調べてみると、「ネネムの伝記」の挿入童謡は、大正十年賢治が上京してから書いた「かしはばやしの夜」と「月夜のでんしんばしら」の同音の連続的エコーを特徴とする挿入童謡と非常によく似ていることがわかる。

このように見てくると、「ネネムの伝記」は、上京以前の初期作品群とも、そして上京以後の作品群とも共通点を持っていることが解る。つまり「ネネムの伝記」は、上京以前の作品群と上京以後の作品群の中間に位置するものと考えられる。そしてこの両作品群の分岐点となっている上京が大正十年一月であることから、「ネネムの伝記」は大正九年前後に制作されたと推測できる。

「ネネムの伝記」で一貫してテーマとなっているのは、飢餓によって孤児になったネネムが、大博士に認められることによって、絶対的な権力者、化物世界裁判長になるまでのネネムの立身していく過程である。

それでは、境忠一が指摘する「鬱屈した賢治の精神状態」とは何だったのだろうか。

賢治は、大正七年三月盛岡高等農林学校卒業後、五月から恩師である関豊太郎教授の勧めにより、実験指導補助として学校に残り、稗貫郡の土性調査を行っている。当時の書簡に次のような記述が見られる。

研究科には残り候とも土性の調査のみにては将来実業に入る為には殆んど仕方なく農場、開墾ならば兎に角差当り化学工業方面に向ふには全く別方面の事に有之候 ―後略―
(父宮沢政次郎あて封書)

この記述から、賢治は土性調査は自分の望む「実業」の道、特に化学工業には役立たないとして、この仕事に就く意志のないことを訴えていることがわかる。

大正七年十一月から翌年二月まで、賢治は妹トシの看病のため上京している。この間にも賢治は、自分の望む職業に就きたい旨を書簡で述べている。この後、一月三十一日と二月二日の書簡には、仕事の具体的な構想まで書いている。しかし父親には認められなかった。

大正八年二月に帰郷した賢治は、大正十年一月に再度上京するまで、家業である質屋と古着屋の店番をしている。この間には次のような書簡がある。

私は暗い生活をしてゐます。うすくらがりのなかで遙に青空のぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます。(成瀬金太

郎あて葉書)

商賈をすれば偽を云ったり、偽になるやうなうまい方法をつかったりしなければなりません。

質屋の店には、利慾と戦ひ。(保阪嘉内あて封書)

これら一連の書簡は、賢治が家業に対して批判的であり、また「実業」への夢も捨てていなかったことを物語っている。

このような状態の中で賢治は、大正三年から持っていた法華經信仰をより強めている。

大正九年賢治は、本意にそわない店番をしながら田中智学著『本化妙宗式目講義録』全五巻を読破し、日蓮主義の宗教団体、国柱会に入会している。賢治にとって法華經は、非常に大きな精神的根底としての役割りを持つようになったのである。それは大正十年一月に父母が改宗を聞き入れないことを原因として、無断上京していることからわかる。

又同年二月には、国柱会の高知尾智耀から文芸により大乘の教えを広めるよう示唆されている。このことが賢治を「法華文学」の道に進める大きな原因になったと思われる。

同年七月の書簡に次のような記述がある。

これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です。いくら字を並べても心にならないのはてんで音の工合からちがふ。頭が痛くなる。(関徳彌あて封書)

このように見えてくると、「ネネムの伝記」は、長男として家業を継ぐ立場にありながら家業に批判的であり、「実業」に就

こうとしても父親に認められず、更には法華經の信仰に燃えることにより、信仰の違いによる両親との対立に苦悩するといった賢治の姿を、裏に持った作品とみることができる。また、賢治自身の立身とまではいかなくとも、新しい仕事、つまり「実業」に取り組み、成功したいという賢治の願いを中心として、書き表されたものと言える。

二、「ペンネンノルデ」のメモ

「ネネムの伝記」と「グスコープドリの伝記」の中間に「ペンネンノルデはいまはいないよ」が始まる、半紙一枚に書かれた創作メモが残されている。この創作メモを直接もとにした童話は書かれていない。そして制作年代を推定したものは、森惣一の昭和三年頃とする説だけである。

「ノルデのメモ」の前半は、ほとんど「ネネムの伝記」と同様の展開である。そして作品世界も化物世界である。しかし後半の展開には大きな違いがある。「ネネムの伝記」では化物世界裁判長にまでなったネネムの立身が「ペンネンノルデのメモ」では、ノルデの立身は噴火係で止まっており、ノルデの立身よりもノルデが天災を防ぐためにいかに努力するかに中心が移っているのである。

それから、ペンネンネンネン・ネネムがペンネンノルデに、ハンムンムンムン・ムムネ市がモネラ市に変わっている等、「ネネムの伝記」に見られた同音のエコーの連続が見ら

れないことも指摘できる。

さて、この「ペンネンノルデのメモ」は賢治のどのような状態の中から生まれてきたのだろうか。

大正十四年四月十三日の書簡に次のような記述が見られる。

多分は、来春はやめてもう本当の百姓になります。そして小さな農民劇団を利害なしに創つたりしたいと思ふのです。

（杉山芳松あて封書）

この書簡の通り賢治は、大正十五年三月三十日、花巻農学校を退職し、農民として働き出している。そして同年八月には、羅須地人協会を発足している。羅須地人協会では、農村青年や篤農家を集め、稲作法、科学、そして当時の賢治の観念的な理想主義をあらわしている農民芸術概論綱要等の講義をしたり、農民楽団の結成、子供会等の活動をしている。又、肥料設計、稲作指導にも力を注ぎ、農民の相談を精力的に受けている。この時点で賢治は、農村問題に目を向け、主体的に取り組もうとしているのである。

この羅須地人協会は、昭和三年八月、賢治が天候不順による稲作不良を心配して風雨の中を一人奔走して、病に倒れるまで続けられている。この時期の影響が「ペンネンノルデのメモ」には大きく現われているのである。

このように見てくると、「ペンネンノルデのメモ」は、「ネムの伝記」の主題であった主人公の立身に、農民への思いやりを根底に置いた賢治の意識を反映した主人公が、天災の克服

のために努力することを加えたものと考えられる。

三、「グスコブドリの伝記」

「グスコブドリの伝記」は、昭和七年三月の『児童文学』第二冊に発表されている。賢治としては長編の童話である。発表の際の清書原稿は現存していないが、下書稿が残っており入沢康夫により「グスコブドリの伝記」としてまとめられている。

大筋を見てみると、「グスコブドリの伝記」は「グスコブドリの伝記」からの変化はほとんど見られない。

しかしブドリの自己犠牲については違いが指摘できる。

「グスコブドリの伝記」のブドリは、絶えず献身の精神のもとに働いているのである。これに対し「グスコブドリの伝記」では、ブドリの自己犠牲の伏線となるような言葉は見られず、中心になっていたブドリの自己犠牲に至る英雄的な生き方が目立たなくなり、天災の科学力による克服の面が強められたのである。賢治はなぜこのような改作を行ったのだろうか。

昭和五年春の健康快復とともに、賢治は精力的に働き出している。しかしそれは、病に倒れたことによって中断された羅須地人協会の再建ではなく、東北碎石工場の技師としてであった。

同年四月の書簡には、

こんどはけれども半人前しかない百姓でもありませんから、思い切って新しい方面へ活路を拓きたいと思ひます。——中

略—もう一度新しい進路を開いて幾分でもみなさんのご厚意に酬いたいとばかり考えます。(沢里武治あて封書)

という記述が見られる。ここから、賢治は羅須地人協会と違った新しい方法で農村問題に取り組もうとしていることがわかる。

賢治が、羅須地人協会を再建せずに、東北碎石工場へと目を向けていったのは、農村への思いやりの面では、羅須地人協会と変わっていないが、羅須地人協会の失敗で個人の限界を知った賢治が、科学を中心において、農村問題に取り組もうとしているためと推測できる。

このように見てくると、「グスコーブドリの伝記」からの改作は、科学による農村問題の克服を考えていた賢治が、「グスコーブドリの伝記」はブドリの自己犠牲に至る英雄的な生き方が目立ちすぎ、科学による天災の克服が弱められていると感じたためだったと考えられる。

以上考察してきたことから、「グスコーブドリの伝記」の主題を考えてみよう。

鳥越信は「グスコーブドリの伝記」の主題を「自己犠牲」ととらえている。この点については、多くの人たちも一致している。これは、ブドリの自己犠牲に至る英雄的な生き方に重点を置いた見方である。しかし、むしろ「グスコーブドリの伝記」の主題は、続橋達雄が

羅須地人協会時代の体験を踏まえ、冷害(天候不順)と肥料の問題を科学力で解決し、明るい農村を建設するユー

トピアを語った。

ととらえているように、農民への思いやりを根底に置いて、羅須地人協会で成し遂げなかったユートピアの建設を科学の力で、肥料の問題と天災を克服することによって、成し遂げることであったと考えるべきである。

四、「ネネムの伝記」と「グスコーブドリの伝記」

「ネネムの伝記」と「グスコーブドリの伝記」の関係について中村稔は、「ネネムの伝記」は、「グスコーブドリの伝記」の決定的な骨格を欠いており、「グスコーブドリの伝記」の母胎ないしは第一稿とみることは無理である、と断定している。又、境忠一も、「ネネムの伝記」は「グスコーブドリの伝記」の初稿とするには、あまりに主題の相異点が多いとして、「グスコーブドリの伝記」の草稿としては、直接には結びつかないとみた方が妥当だと述べている。

両氏の指摘は、どこからきているのだろうか。中村稔が「その決定的なちがいは、ネネムは農民の中に戻っていかなかったという点にある。」と指摘しているように、「グスコーブドリの伝記」で主題となっている、農民のための科学による天災の克服が「ネネムの伝記」では一言も触れられていない点にある。「ネネムの伝記」で天災が出てくるのは、冒頭部分だけである。そして全体を通じて、農民の姿は一度も描かれていない。

「ネネムの伝記」制作当時の賢治は、法華経(国柱会)の信

仰と、家業と将来に対する煩悶で一杯であり、農民に対する関心は見られない。しかしこれに対し「グスコープドリの伝記」は、花巻農学校を退職し農民のために行なった羅須地人協会の失敗で、個人の限界を知った後、病身ながら、科学による農村問題克服を胸に東北碎石工場で奔走している時期に書かれた作品である。両作品の制作当時の賢治の意識の違いを考えてみると、この大きな違いはうなずける。

しかし「ネネムの伝記」と「グスコープドリの伝記」だけでなく、「ペンネンノルデのメモ」と「グスコンプドリの伝記」をも含めて考えると、違った見方もできるのではないだろうか。それでは主題の変化を見てみよう。

「ネネムの伝記」の主題は、ネネムの権力者への立身である。次に書かれた「ペンネンノルデのメモ」は、ノルデの立身とノルデが天災を防ぐために努力することが主題と推定できる。そして次に書かれた「グスコンプドリの伝記」は、「ペンネンノルデのメモ」を発展させ現実の人間世界に置き換え、ブドリの献身を中心に置きながら、科学力による天災の克服を主題とした作品である。そして「グスコープドリの伝記」は、「グスコンプドリの伝記」で目立ちすぎたブドリの自己犠牲を自然の形にすると共に、主題の科学力による天災の克服を一層強めた作品である。つまり「ペンネンノルデのメモ」を書いた時点で、すでに賢治は農村問題に目を向け精力的に取り組んでおり、「ペンネンノルデのメモ」の主題の発展したものが、「グスコープ

ドリの伝記」の主題になっているといえる。

そして表現と内容を見てみると、「ペンネンノルデのメモ」は「ネネムの伝記」の要素を多く持っており、「グスコンプドリの伝記」と「グスコープドリの伝記」は、その要素を受け継いでいることがわかる。そして、どの作品も前の作品から少なからず影響を受けており、その変化は段階的であり、まさに改作であるといえる。

以上見てきたように、主題、表現、内容から考えてみると、「ネネムの伝記」が「ペンネンノルデのメモ」に、そしてそれが「グスコンプドリの伝記」に改作され、その最終形が「グスコープドリの伝記」である。つまり「ネネムの伝記」は、「グスコープドリの伝記」の初期形であると見る事ができる。

おわりに

以上見てきたような、「ネネム・ブドリ系作品群」の度重なる改作による変遷と、賢治の意識の変遷とを合わせて考えると、「ネネムの伝記」に、制作当時の自分自身の姿と理想を盛り込んだ賢治は、その後の意識の変化に合わせて、「ネネムの伝記」を徐々に改作していったと考えられる。

その時々賢治のユートピアを語っていることが、「ネネム・ブドリ系作品群」の特徴である。そして、賢治の精神史の変遷がそのまま「ネネム・ブドリ系作品群」の変遷につながっているのである。